

学位論文要旨

専攻：共同教科開発学専攻

氏名：名倉 一美

論文題目：保育における幼児の「集団所属感」アセスメントツールの開発

論文要旨：

1. 研究の背景と目的

現在、日本では保育者不足が深刻な社会問題となっており¹⁾、量的補充が優先される一方、実践の質保障が疎かになっている²⁾。しかし保育実践の質的把握は、各施設や保育者の判断に委ねられており、統一アセスメントは存在しない³⁾。すべての保育の最低限の質を保障するためには、保育者間で共有できるアセスメントが必要である。保育実践の質を明らかにする視点の一つに、幼児の「居場所」の有無がある。家族以外の他者と集団生活を送る中で、幼児が自分の居場所があると感じているかどうかは、情緒の安定に大きな影響を与える。そこで本研究は、保育施設に通う幼児が、自分の所属するクラス集団の中に居場所があると主観的に感じることを「集団所属感^{注1)}」と定義し、その実態把握を行うために、友達との関わりが増加する幼児期後期の4, 5歳児を対象としたアセスメントツールを開発することを目的とした。

2. 研究の概要（方法および結果）

本研究では、幼児の「集団所属感」を把握するための2つのツール（幼児質問用アセスメントと、保育者観察用アセスメント）を開発した。開発にあたって行った調査は、以下のとおりである。

第1章では、実際に保育者が行っているアセスメントの現状把握のため、5歳児集団保育の実践記録を分析した。保育者が捉えている5歳児の姿には多種多様な記述があり、保育者間で共通点はあるものの、共通言語化にまで至っていないことが明らかとなった。第2章では、4人の担任保育者の実践観察から、幼児と幼児の関係をつなぐような援助行動を抽出し、活動場面別比較を通して保育者のアセスメントの特徴分析を行った。保育者が幼児同士をつなぐような援助行動は、保育者から一斉に働きかける集団活動場面よりも、幼児が好きな遊びを自由に選択して遊ぶ「好きな遊び場面」で多様にみられ、幼児の他児との関係性のアセスメントを行うには、「好きな遊び場面」が適していることが示唆された。第3章では、幼児に直接質問を行う「集団所属感」のアセスメントツールを開発するため、卒園間近の5歳児を対象に口頭質問調査を行った。他児評価と保育者評価との相関から分析した

注1) R.F.Baumeister&M.R.Leary. (1995). The need to belong : Desire for interpersonal attachment as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117(3), 497-529.の理論から、心理的居場所を「所属 : belong」の欲求として位置付けた。

結果、「集団への信頼感」「集団への好意」「具体的活動」の3つの項目の妥当性が明らかとなり、これらに対応した5つの質問によるアセスメントツールを作成した。第4章では、保育者観察用アセスメントツールを作成するため、「集団所属感」の変化が把握しやすい転入児(4歳児)の観察を行った。その結果、「他児」「保育者」「探索行動(関わりなし)」といった対象別で転入児の関わり行動に変化がみられた。中でも「他児」との関わりでは、「他児模倣」「気の合う特定の友達」「同じ興味を持つ友達との遊び」「友達との名前呼び合い」「友達とのトラブル」といった5つの視点で行動変化が抽出され、これらを項目に用いて保育者観察用アセスメントツールを作成した。第5章では、第4章で開発したツールの信頼性を検証するため、転入児の担任保育者2名にインタビュー調査を行った。保育者の回答から抽出された転入児の姿と、第4章の観察で抽出された行動変化との比較から、アセスメント項目の信頼性を明らかにした。

3. 結論

本研究で開発した2つのアセスメントツールの新規性は次の4点である。

1つは、保育実践の最低限の質的保障として、幼児の「集団所属感」に焦点をあてた点である。幼児の「集団所属感」の保障は、集団の中での情緒の安定につながり、保育における養護機能を果たす。また同時に、幼児の「集団所属感」の保障は、対話的幼児集団の土台形成でもあり、保育における教育機能ともいえる。このことから、本研究では幼児の「集団所属感」の保障が、幼児期後期の保育実践における最低限の質的保障につながると捉え、そのアセスメントツールを開発した。2つ目は、開発したツールの1つが、幼児に直接質問を行うという点である。これまで幼児のアセスメントは、幼児期の言語発達を踏まえ保育者(大人)による観察が中心であった。しかし本ツールは、質問内容を理解できる(おおよそ言語発達が4歳以上の)幼児であれば実施可能であり、担任保育者に限らず誰でも幼児本人から直接、内面を把握することができる。3つ目は、保育者が日頃の観察で無意識に捉えていた視点を、保育者観察用アセスメントツールで具体的に言語化したことである。観察視点の明示化により、日常の保育の中で、幼児の「集団所属感」を迅速かつ的確に把握することができる。4つ目は、幼児の「集団所属感」アセスメントが、発達や能力を測るものではない点である。そのため、発達障害児や外国人幼児といった発達や文化が異なる幼児であっても、集団の中に居場所があると感じていれば「集団所属感」は高くなる。このことから、幼児の「集団所属感」アセスメントは、インクルーシブ保育や多文化共生保育におけるアセスメントツールの一つにもなり得ると考える。

今後は、このアセスメントを多様な幼児に用いて妥当性を高めるとともに、保育実践の内容や方法との関連性を明らかにして具体的な実践の質改善につなげていくことが課題である。

引用文献

- 1) 厚生労働省.(2016). 保育所等関連状況取りまとめ(平成28年4月1日)及び『待機児童解消加速化プラン』集計結果を公表. 児童家庭局保育課, 9.
- 2) 池本美香(2018). 保育評価の展望—一元化評価の意義と可能性—. 保育学研究, 56(1), 11-20.